

# 當於如來余深法中示教利喜について

法華經覺書

望月淑夫

1

妙法華囑累品の冒頭は釈迦牟尼仏が無量の菩薩摩訶薩に対して、得難き阿耨多羅三藐三菩提の法を付囑することの説示をもって初められている。これは神力品の本化別付囑に対して、総付囑を説いたものである、として考えられていることは周知の通りであるが、今、梵文法華、妙法華と正法華とを比較対照して見るときに氣付き得る点は、この三藐三菩提の法を付囑するという箇所の表現が夫々相異していることである。これを第一の点とするなら、第二の相異箇所は囑累品の中に於ける、若し衆生あって云々と語られる部分である。その他の箇所の相異は法華經讖訳の語句の使用上に由来すると考えられるのに対し、上掲二ヶ所は内容上で異った解釈を生ぜしめる理由を内在せしめてい

るように考えられる。

2

妙法華の囑累品中には次の言葉が語られる。

若有衆生不信受者當於如來余深法中示教利喜<sup>①</sup>

これは釈迦牟尼仏が阿耨多羅三藐三菩提の法を付嘱し、此の法を受持、誦、誦し法を弘めることを心掛けなければならない、ということ説いた後の説示である。併し、諸経中の王として取扱われて来た法華経が自らの経中に於て自経の受持誦誦を強調することは当然であるとしても、一切衆生の救済をもつて出発した法華経がその目的のために一仏乘を説き、虚空会の説法を示し、久遠実成の仏を顕現しながらも、何故に当於如来余深法中示教利喜の詞を發しているのであるか、理解し兼ねるところである。若しも法華経が最勝の經典であり、その意味でも一仏乘の大道を歩んで来たものであるなら、法華以外の如来の余の深法なるものは何を意味するか。換言すれば、この言葉は法華経が法華経自身をさして最勝経であり、一乗の大道を歩むものではないこと、を強調しているようには思われまいだろうか。即ち此処に生じて来る疑問は果して法華経は最勝一仏乘の經典ではないのか、ということ、更に、法華経以上に優れた經典が他に存在するのかもしれないことであろう。しかるに法華経以上に優れた經典として、法華経の理想を更に強める所の經典にして妙法華経の余の深法なる言葉に該当すると思われる經典は現存していないところであり、かゝる性質のものに就ての先師の著述の中の文章には全く見られないものであるから第二の疑問は成立せられ難いところである。従つて、此処で残るのは第一の疑問である。

今、試みにこの妙法華の文章と現存の正法華、梵文法華の文章の該當箇所を比較対照してみると次の如くである。

若有二衆生、不信受者。當下於如来余深法中、示教利喜、汝等若能如是。則為己報諸仏之恩。<sup>①</sup>  
其不信者。当令信樂。当觀群生入干尊法。諸族姓子。能如是者。則知如来之所建立。<sup>②</sup>

ye cāśraddhāḥ sattvās te 'smin dharmā — paryāye samādāpayitavyāḥ — evaṃ yuṣṃabhīḥ kula — patrā  
stahāgatānāṃ pratīkaraḥ kṛto bhaviṣyati <sup>②</sup>

この三種の法華經に於て明白なように、前半に於て極めて著しい相異が存する。即ち妙法華の当<sub>F</sub>於<sub>二</sub>如来余深法中<sub>一</sub>示教利喜<sub>上</sub>という文章は正法華の中に於ては、当令信棄。当觀群生入千尊法と表現されており、更に梵文法華に於ても、te smim dharmā — paryāye samādāpavitavyāḥ であり、te は、tat の男性、複數、主格。asmin は idam の男性、單數、於格。dharmā — paryāye も男性、單數、於格。samādāpavitavyāḥ は sam + ā + √dā であり、dāpaya は催起相、現在語基（与えしむ）itavyāḥ は動形容詞作製上の付加詞であるから、dāpavitavyāḥ は催起相動形容であるから、上掲の文は「彼等はこの法門に於て与えしめらるべし」と訳すことが出来る。この時、彼等というのはその前の asraddhāḥ sattvas を受け継いでいることは明白であるから、信ぜざる人を意味する。従つて信ぜざる人々はこの法門に於て与えらるべし、の文章であつて、何を与えしめるかの直接の説示は見られないけれども、かくの如くすることが如来の報恩であるという点や、或は囑累品の内容から見ると、与えしめるものは阿耨多羅三藐三菩提であることは明白である。このような点からしても此の法門と称せられる dharmā paryāya は法華經であることを理解し得ると考えられるのであるから、正法華梵文法華の中には共に妙法華に見られるような余の深法の中に於て云々の言葉や内容、更に気配すらも見出すことは出来ない。しかし、羅什訳妙法華の原本となつた梵文法華がこれ等三本の中で最古のものであつたと考えられている現状としては、以上の点を比較して見た處で直に法華翻譯上の羅什の誤訳であつたと速断することは出来ないのであるが、これを解き得るには法華經全般にわたつての念密な研究が必要であらう。

そこでとりあえず囑累品は何をしようとしたものであるかを考えてみるとすると、先づ、現存の漢訳法華経では一様にこの品を囑累品と訳し、梵文法華経は *anuparindana* と記している。これは *anu + parin + dana*  $\sqrt{da}$  であるから、誰れかに何物かを与える（付囑する）章と読むことが出来るわけであり従って、囑累品の呼称は適切であると云い得る。この付囑の問題は既に布施教授が触れている所であるが、誰れに？は *sarva bodhisattva gāṇa* であり、何を？は *anuttara samyak-sambodhi* である。これは囑累品の付囑であつて、別付囑と称せられる神力品の為ニ囑累一故説ニ此経功德云々と上行等の菩薩大衆に語られているのは明白に異っている。即ち、神力品に於ては、誰に？は *Viśiṣṭacāritra-pramukhān bodhisattva mahasattva* であり、何を？は明白ではないがやはり *dharmā paryāya* であらうと思われる。しかし、囑累品に於ては明瞭に付囑すると語られているのに神力品ではかく語られておらない。この両品の相異を正法華の中に見ると、神足行品には仏滅度後。当以懇懃求此經典という文章は見られるのであるが、上行等の菩薩にこの法門を付囑しようとする言葉に該当する意志は見られない。囑累品では合諸菩薩……諸族姓子仏従無数不可計会億百千劫積累造行。乃成無上正真之道。得度無極。故取諸賢安措右掌。奉手下之以為念識、となつておるのであり、梵文法華経も亦 *asya dharmā-paryāyasya parindanaṁ rtham nāna-dharmā-pramukhair*

*sarvāṃs tām bodhisattvaṃ piṇḍi-kṛtya……imān aham kula-putrā asaṅkhyeya-kaṇpa-koti-nayuta-sata-sahasra-samuḍānitām anuttaraṃ samyak-sambodhiṃ yusmākaṃ haṣṭe parindāmy anuparindāmi niksipāmy upaniksipāmi* と記されておる。従つて以上の諸本に依つて見るに、神力品に於ては付囑を行つておら

ないという布施教授の説を知ることが出来る。即ち吉蔵の法華義疏の中には、神力品は神力を現じ法を歎じ人を美め弘経を奨励するものとし、更に爾時仏告以下の文を解釈して、法を歎じて修することを勧むとし、為囑累故の以下を奨励を頌したもので、神力品は囑累品の付囑流通を弁ずるものであるのに対して、称歎流通をなすものであると記されている。更に羅什の弟子道生の著、法華經疏の中には

於濁末取信難將付囑法華故先現踰神力令衆喜悅發其奇想遠使十方稱南無婦命於後致信無間然矣<sup>⑤</sup>

と記述され、法華を付囑し難き故に神力を現じ衆生をして南無と称えしめたと解せうるので、吉蔵の云う称歎流通の意味に通ずるものであらうと思われる。この両者の考えに対しては智顛、慈恩等の異った解釈——別付囑——が存することは周知の通りであるが、詳細は布施教授の著書を御覧願いたい。

#### 4

かくの如く神力品別付囑の解釈はいささか疑問の存するところであるのに対し、囑累品では一様に付囑を行ったものと解釈している。即ち囑累品の註釈に於て道生は

前説因三時並已付囑義既末周不別立品今明因俱竟<sup>⑦</sup>

と記し、更に

今持此經摩頂而付者以理深事大要〇〇惣為是義故立品耳<sup>⑧</sup>

と註釈している。この中、二字欠字である為に明確な意味を計り難いけれども、理をもって深事の大意を付囑したのであって、この理由の為に法華経は説かれたものであると解することは曲学垂世の徒であらうか。深事の大意とは法

華經の教えであり、その教えによる証りであるのではないだろうか。証の付嘱は法華經嘱累品初頭に於ける大事である点からしても、それは三藐三菩提を意味するものではあるまいか。即ち如来神力品には次の言葉が見られる。

evam yuṣmabhiḥ karaṇyam asya dharmā—pariyāsyārthe

dharmā—pariyāsyārthe は法門の意義（目的）と訳すべきであろう。法門とは何か、に就ても同品に巧な説明が存する。

vayam api bhagavaṇm imaṃ dharmā—pariyāyaṃ saṃprakāśyaṣyāmas tathagātaṣya

parinirvāsyādiṣṭen' ātmabhāvena

如来の涅槃の見られざる自我の個有な形の法門と、そして、この法門に於て一切の仏の最上の存在、神秘なる教説、深妙なる住処を如来は指示せしめんとしたものである。

挙要言之、仮令有人欲了斯經要、悉仏威神普諸仏法、諸世尊界諸仏精進、諸仏閑居諸仏妙力、示現是經<sup>⑨</sup>と、正法華に示され妙法華も亦

以要言之、如来一切所有之法、如来一切自在神力、如来一切秘要之藏、神来一切甚深之事、皆於此經宣示顯説と示され、梵文法華亦次の如く記している。

saṃkṣepena kula—putraḥ sarva—buddha—viśabhita sarva—buddha—rahasyaṃ sarva—buddha—

gambhīra—sthānaṃ mayā'smin dharmā—pariyāye deṣitam

従ってこれらは、悟りの境地に住する人としての如来の世界を示し、導かんとしたこの法門の目的にそうべく努力しなければならぬとする意味に理解され得るのであり、嘱累品に示された、法華經の受持読誦広宣に合一する内容の

ものであると考へうる。換言すれば囑累品の意趣は神力品の称歎流通を受け継ぎ、付囑流通に専意が用いられておるといふ。

5

法華經に於て此の法門 *idam dharma paryāya* といふ時、それは法華經自らを指示していることは明白なところであつて、囑累品が阿耨多羅三藐三菩提を付囑することによつて、一切衆生の救済を心掛けたものである点からしても、囑累品中辺の

*asīdādhāṅ satvās te śmin dharma—paryāye samādāparyāyah*

は、信ぜざる人々、彼等はこの法門に於て与えしめらるべし、と訳さるべきであらう。従つて梵文法華經の中には余の深法の中に於て云々の内容は認められない所であり、正法華經も亦然りということは前記の通りである。併し、上記二本ともその内容判別の上に於て明瞭を欠く点を残していることは否定出来ない。

当勤聴受此要經典。其不信者。当令信樂。

*kula—putrāṅām kula—duhitrīṅām cāyaṁ dharma—pyrāyāyah saṁśrāvayitavyah—ye cāśīdādhāṅ*

善男子善女人にこの法門を聞かしめんに、と云いながら直ちに、信受せざらん者には……と続けられるからであつて、この点が羅什が異訳を行ひ於如来余深法中と訳出した理由ではなからうか。道生の法華經疏の中にこの箇所就ての説明の見られないのは、禪訳上の意識であると考え得たためではないだろうか。これに対し、文句、義疏、玄贊には夫々註釈が見える。その中文句に示される、余の深法は別教の次第なりとするのがこれ等の註釈の凡てを語るもの、

ようであり、法華經の法門を广泛宣传との意に解していることは明白である。換言すれば一切衆生の救済は法華の思想に於てのみ成立し得るものであることを意味する。従つて当於如来余深法中示教利喜には別段に深い意趣ありとは考えられず、翻譯上の意識であるのではなからうか。——了——

【註訳】

- ①大正 VOL 9 二六二 P五二 下  
② ” ” 二六三 P一三四 中。  
③梵文については荻原本を参照しました。  
④大正 法華義疏參証  
⑤大正 法華義疏參証  
⑥卍字藏經 四十一b上  
⑦卍字藏經 四十一b下  
⑧ ” 四十一b  
⑨大正 VOL q二六三 P一二四 中  
⑩大正 VOL q二六二 P五二 上